

男と女

福井大学教育学部附属義務教育学校

九年 村中希光

私は、小学一年生の頃から柔道を習い始め、中学生になってから、新しいチームに移った。中学一年の時は、私を含めて同級生が三人いて、私と二人の男子だった。当時はあまり「男」「女」ということを気にしておらず三人で遊んだりふざけたりして、楽しく柔道の時間を過ごしていた。まだ小学生のような気持ちだったのだろう。だが、日が経つにつれて、だんだんと話すことも減り、事務的なことを伝えるばかりになった。日常的な会話をすることも減っていった。私が思春期になり、自分だけ女だからという考えで、チームメイトとの間に壁を作っていたようにも思う。さらにその考えが強まったのは、中二になった頃だ。新しく六人の新生が入ってきたのだ。新生は全員男子で、仲間が増えた嬉しさで、でも女一人という孤独が続く悲しさが入り混じり、とても複雑な気持ちになった。女一人に対して男八人という環境に変わったからだ。「もしかしたら女子が入ってくるかもしれない」と、淡い期待を抱いていたから、そのギャツ

プで悲しさも大きくなったのかもしれない。それから、
どんどん仲間との距離はさらに離れていき、楽しくない
と悩むことも増えて柔道をやめようかと考えることもあ
った。しかし、中二の夏を境に何かが変わった。北信越
大会に、私と同じチームの男子二人が出場した。大会会
場に着くと、いつも通り私は一人で試合会場に向かおう
と、足早に歩いていった。そのとき、「待って、一緒に行こ
う」と一人が声をかけてくれた。私にはその一言がたま
らなく嬉しかったのを覚えている。男子二人の間に割っ
て入るのも申し訳ないな、気まずくしてしまったらどう
しようという不安から自分から距離をとっていたが、相
手が話を振ってくれたことで、私は少し安堵した。この
会場へ移動するひとときから、少しずつ練習の合間や遠
征の行き帰りなど、いろいろな場面で話すことが増えて
いった。私にとって、苦痛だった柔道の時間が少しずつ
楽しい時間になっていった。

中二の夏頃からチームメイトとの環境はよくなったが、
練習態度に、私は「女一人」という考えを無意識に言い
訳として使うことが増えていった。なぜ私は女なのに男
と同じきついメニューをしなければいけないのか、女な
のだから私ができないのもしようがない、男とやるとき
は男子より強くないように遠慮してやらないといけない。

今思い返しても山ほど思いつく。そして、正直私は自分自身を「女一人でかわいそう」と悲観していたのだと分かった。ただ言い訳をずらずらと述べて辛いことから逃げたかっただけだった。自分自身で、この自分の置かれた環境を悪いものにしていくことに気づいた。私は、女は力がないだろうと勝手に決めつけないでほしいと思っているのに、辛い時だけ女だということを使い訳にしていた。男の場合でも、男は力が強いからという考えを押し付けるのは良くない。そうでない人も多くいるからだ。もちろん、辛い練習メニューや月経中の練習など、自分が女であり男と違うことを痛感させられる場面は多々あるが、今は以前よりも格別に楽しい柔道ライフを送っている。私がそう在れるのはチームメイトや先生のおかげだということ、先生もチームメイトも、良くも悪くも「女だから」とは言わず、平等にしてくれているのだということに気づけたからだ。平等だが、その中に一人のチームメイト、一人の教え子として思いやりや優しさを持って接してくれていることに気がついた。例えば、私がトレーニングにくじけそうな時には励ましの声をかけてくれたり、試合中には他の男子への応援と同じかそれ以上に声を出してくれたりした。先生も月経の事を気にして体調や着替えなどの配慮をしてくれた。本当に感謝して

いる。

私は、「男」と「女」という壁をぶち壊したいと思った。だが、壁は自分で作っているものだと分かった。過去の私のように「女だから」と自分で平等を遠ざけ、異性との間に勝手な偏見を持つことが問題だと考える。そうならないために大事なことが二つあることが分かった。一つ目は、いろいろな人とコミュニケーションをとり、互いのことを分かり合うことだ。二つ目は、相手の性別に関わらず、相手の気持ちや体調を思いやって行動し、そうしてもらっていることを互いに感謝することだ。柔道という共通の目的を持った仲間に男も女も関係ない。同じ仲間としての強い絆には、この二つのが大切だと三年間を通じて得ることができた。最近は男女平等という考えが根付いてきている。私は互いに平等を目指せるような社会になるよう願っている。誰がどんな環境でも活躍したり心地よく過ごしたりできるといいなと思う。

本当の差別をしないこと

あわらし市芦原中学校 三年 麻王和希

僕は、あるスポーツニュースを見て、心を強く動かされました。それは、片手が使えない障がいを持った高校生が、野球部でレギュラーとして甲子園に出場しているというニュースでした。映像の中で全力でプレーする姿は本当にかっこよく、思わず見入ってしまいました。そして、「すごいな」「ここまで来るにはどれだけの努力をしてきたのだろう」と尊敬の気持ちも抱きました。けれども、同時に、ある疑問が浮かびました。どうしてこの選手の活躍が、こんなに大きくニュースになるのだろうか。考えてみると、もしこの選手が健常者だったなら、甲子園に出場してレギュラーとして活躍しても、それだけで大きなニュースにはならなかったはずです。つまり、ニュースになっている背景には、「障がいを持っているのに甲子園で活躍している」という特別な見方があるのではないかと思ったのです。

「障がいがあるのに、すごいね」「ハンデがあるのに、活躍していてえらいね」

こうした言葉の中には、一見すると賞賛や応援の気持ち
が込められているように見えます。しかし、その裏側には
「障がいがある人は普通出来るわけない」という前提
が隠れている気がします。だからこそ「できるとすごい」
という評価につながっているのではないのでしょうか。で
も、それは、本当に平等な見方なのでしょうか。たとえ
ば、僕たちが日常で何かをがんばったとき、「目が見える
のにすごいね」とか「足がふたつあるのにえらいね」と
は言われません。けれども、障がいのある人が何かを成
しとげたときには、「○○ができないのに、えらいね」と
言われることがあります。そこにはやはり「できないの
があたり前」という思い込みがあるのだと思います。も
ちろん、障がいがある分、健常者よりも多くの努力を積
み重ねてきたのは事実でしょう。体の使い方を工夫した
り、練習の仕方を変えたり、精神的な負担とも戦いなが
ら続けてきたのだと思います。その努力は確かに尊敬す
べきものです。しかし一方で、障がいのある人は、自分
がその障がいを持ってしていると理解した上で、そのスポー
ツをやりたいと思って挑戦しているのです。つまり、不
利であっても、僕たち周りの人は気にすることはなく過
ごしていればよいと思います。障がいがあるからといって
特別扱いするのではなく、「一人の選手」として見ればい

いのだと思えます。そして、それが当たり前前の社会ならば、障がい者の活躍が大きくニューズになることも、本来はないのではないのでしょうか。

僕たちが目指すべき社会は、「障がいのある人でも活躍できる社会」ではなく、「障がいのある人が活躍していても、それが特別ではない社会」だと僕は考えます。「片手が使えないのにすごい」と評価されるのではなく、「チームのレギュラーとして活躍してすごい」と純粋に実力や成果が認められる社会。それこそが、本当に差別のない社会なのだと思います。

しかし、実際にそのような社会をつくるのは簡単なことではありません。僕たち自身の中に、「これは当たり前だ」という思い込みや、無意識の偏見が根強く存在しているからです。人を平等に見るといえるのは、頭でわかっているだけでも、実際にはとても難しいことです。だからこそ、まずは自分自身の心の中にある「当たり前」を疑うことから始める必要があるのではないのでしょうか。

僕が思う「本当の差別をしないこと」とは、障がいのある人を、下に見たり、特別視したりせず、「普通の人」として接することだと思います。「障がいがあるからかわいそう」という気持ちも、優しさのようでいて、実は上から目線の考えかもしれません。障がいを持ってる人に

あったら、何も思わなくていいのです。普通にしていればいいのです。そして、困っていたら、普通に助けなければいいのです。

障がいのある人を、「特別な存在」として見るのではなく、「ひとりの人」として向き合うこと。それは一見小さな心がけのようですが、社会全体がそのように変わっていけば、大きな力になると思います。障がいがあってもなくても、同じ人間として、同じように努力を重ね、同じように夢を追いかけている。その事実を当たり前のように受け止められる社会こそが、本当に平等で差別ない社会なのだと思っています。

そして僕は、その第一歩として、自分の中の偏見や思い込みに気づき、問い直すことを続けていきたいと思えます。ニュースを見て心を動かされたことをきっかけに、今後は「どう感じるか」だけでなく、「なぜそう感じるのか」を考えながら、より広い視点を持てるようになりたいです。そうやって一人一人が成長していけば、きっと社会全体も少しずつ変わっていけるはずですよ。

人権について考えた

小浜市立小浜第二中学校 一年 上中麻鈴

テレビである番組を観ました。それは、父親がアメリカ人で母親が日本人の間に生まれた女性が、自分のおじいさんの戦争体験を聞いているものでした。第二次世界大戦のとき、アメリカでは、日本の家を実際に何軒も建てて村を作り、それを焼きはらうという訓練をしていたそうです。女性のおじいさんは日本の上空で何度も爆弾を落としていたと聞いて、そのときにどんな気持ちだったのかを聞き出そうとしていました。

おじいさんは、なかなか気持ちを話してくれようとはしませんでした。戦後八十年もたっているからと思いましたが。しかし、しぼり出すように答えてくれたのは、

「日本人は人間じゃなかったんだ……。」
という言葉でした。

「日本人は人間じゃない……。」なんてひどいことを言うのかとショックを受けました。

しかし、しばらくしておじいさんの苦しそうな表情を見て、おじいさんはそのときに洗脳されていたのだろう

と気付きました。

おじいさんは、大人になってから受けた訓練で、「日本人は人間ではないから生命をうばってもいい」と思って平気で爆弾を落としていました。あの涙は今の後悔を表しているのだと感じました。

おじいさんは、戦争が正しいと思っていたわけではないのに、戦争に参加したのだと思います。日本でも「鬼畜米英」といって、敵をにくむ教育をしていたそうです。子どものころからそんな教育を受けていたら、疑問をもたずに敵をにくむ、人間だと思わなくなってしまうのだろうか……。

「人権」とは、「人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持つ権利」だということです。私は毎日の生活の中で、人権について深く考えたことはありません。しかし、今回のテレビ番組で、このことについて考えることが大切なのだと思います。

「日本人は人間ではない」という言葉に私は大きなショックを受けたけれど、これは友だちや家族との関係の中でも起こっていることかも知れません。

一方的に自分の思いだけを相手にぶつけて相手を悲しい思いにさせていないだろうか？ということも、もう一度考えてみたいと思います。例えば、SNSなどでちょ

っとした悪口を書いてしまい、それが大ごとになるとか、デマが拡散して取り返しのつかないことになってしまったりなどということテレビなどで報じています。

幸い、今の私の周りではそんなことはありません。ないからこそ、「人権」に対する正しい考え方を学ぶべきだと思います。

小学校のときから、人権教育は受けてきたと思うのですが、「これがそうだ」というような印象に残るものは残念ですがありません。

いじめや嫌がらせ、障害のある方への差別、外国人に対する差別など、たくさんの人権問題に対する意識は、話を聞いているだけでは育たないと思います。自分のこととして、しっかり納得する必要があると思います。

家族にいろいろと話を聞きました。祖母が子どものころは、みんなで遊んでいてもちよっと仲間はずれのようなことがあると、自分の親はもちろん、近所のおじさんおばさんにすぐに怒られたそうです。大人がいつも子どもの様子を見ていてくれたのです。

また、私の親せきは保育園児のころ、友だちについて行って留守だった文房具屋から消しゴムを持って帰ったことがあります。それに気が付いた家族が、確かめるために友だちの家へ行ったそうです。すると友だちの父

親からもものすごく怒られて、小学生だった友だちは「悪いのは自分だから一人で返してこい。」と言われたそうです。家族はその父親の強い怒り方にびっくりしたそうです。悪いことは悪いとしっかり教えてくれる姿に、子どもを思う心を見せられたと感じたそうです。

このように、子どもたちのところからの環境というのはとても大切だと思います。人を大切にすると、友だちを大切にすると、差別をしない、など人間として生きていくのに大切な心は、小さいころからのていねいな人権教育で育つものだと私は思いました。

『親切』って何だろう」

高浜町立高浜中学校 一年 小林ゆい

京都で市バスに乗った時に感じたことがあります。それは「親切」ということです。私が市バスに乗った時、まだあまり人は乗っていませんでした。しかし、次のバス停で止まった時にたくさんの方が乗って来たので、バスの中は一瞬で満員になりました。ところが、その次のバス停に止まった時、車椅子の方が待っておられました。私は、バスには乗るスペースがないからどうしたらいいのかだろうと不安になりました。ところが、その方がバスに乗ろうとした時、誰が言ったわけでもないのに、乗っていたほとんどのの方がバスの奥に詰めて車椅子の乗るスペースができたのです。しばらくしてベビーカーを押した方がバスに乗って来られたときも同じでした。乗客の方は嫌な顔をせず、黙って乗車スペースを空けていました。私はその光景を見て、みんななんて親切なんだろうと思いました。

また別の日、バスに乗っていた時、お年寄りの方がバスに乗ってこられました。その時、一緒に乗っていた私

のお姉ちゃんとお母さんがお年寄りの方に声をかけて席を譲りました。その光景を見て、お姉ちゃんやお母さんの行為はとても親切だと思いました。だから、今度は私も「親切」な行為をしたいと思いました。そこで、私も勇気を出して声をかけてみました。すると、

「ありがとうございます。」

という言葉が返ってきました。その言葉がすごくうれしく感じました。人に感謝されることはとても気持ちがいいと思いました。だから、これからも勇気を出して人に席を譲れるような人になりたいと思うようになりました。

そんなある日、部活動が終わって電車に乗った時、京都の時と同じように電車の中はたくさんの人で混んでいました。座るところがなかったので立っていたら、私が疲れているように感じたのか、ある男性から、

「この席座る？」

と、声をかけられました。でも私は、いつも立っているから座れないことは苦ではなかったし、降りる駅もすぐだったので、

「大丈夫ですよ。」

と、答えました。私は、「誰でも席を譲って欲しいというわけではないのに。」と感じました。その時、京都での体験を思い出しました。私は席を譲ることが「親切」だと

思っていたけれど、席を譲ろうと声をかけても相手は別に譲ってほしいと思っていないかもしれない。だったら譲らない方がいいのかもしれない。そう思うと声をかける勇気が出なくなり、それ以来、なかなか高齢者の方に声をかけることができなくなってしまいました。席を譲る声をかける方が親切なはずだけど、声をかけない方がありがたいという場合もあるし、いろいろ考えると「親切」って難しい。「親切」って何だろう。と考えるようになりました。どうしてみんなスマートフォンに声をかけて席を譲ることができるのだろう。私はなかなか勇気が出ないのに。「親切」って何だろう。

私は普段、電車で優先席には座らないようにしています。なぜなら、優先席は、障がいがある方や怪我をしている方、お年寄りの方や妊婦の方が優先的に座る席だからです。そんな席に私たちが座ってしまうと、本来座りたい方々が座れなくなってしまったり、その方々に席を譲ろうとしても、その方々は気を遣って断られてしまうかもしれません。だから、優先席は常に空けておくように心がけています。そのことをお母さんに話すと、

「ゆいは親切だね。」

と言われました。別に声をかけて席を譲ったわけでもないのに、親切だと言われることが不思議でした。

そこで「親切」ってなんだろうと改めて考えてみました。高齢者に声をかけたり席を譲ったりすることはもちろん親切だと思います。でも本当の「親切」とは、席を譲る声をかけようと思うことや、感謝されて嬉しいことではなく、誰かのことを考えることだったり、誰かの困っている様子に気づけたりすることではないのでしょうか。親切的な行為をする人の気持ちではなく、親切的な行為をされた方がどう感じるかが大切なのではないかなと思います。だから声をかけられなくても、乗るスペースを空けたり、優先席に座らなかったり、そういう相手のことを考えるとということが必要だと思います。そういう「親切」な気持ちを持つてる人が世の中に増えれば、親切じゃない人や、困っている人に気付けない人にも「親切」な思いが広がっていくのではないかなと思います。多様性を尊重することが求められる現代、誰でも過ごしやすい「親切」の溢れる社会をみんなで築いていけると良いと思います。私もお年寄りの方や、怪我をしている方、子ども連れの方など、普通の生活で人に譲っていききたいと思ったし、京都のバスに乗っていた人みたいに、周りをよく見て、相手のことを考えた行動ができる優しい人になりたいと思いました。

「当たり前」ってなんだろう

おおい町立大飯中学校 三年 西墻暖陽

「男のくせに泣くなんて情けない。」

「女の子なんだから静かにしなさい。」

小さいころから何となく聞いてきた言葉。でも、最近それって本当に正しいのかな？と考えるようになった。

私がこのことに強く疑問を持ったのは、ある友達との会話がきっかけだった。友達が

「将来、保育士になりたい。」

と言ったとき、他の子が

「えっ、男なの？」

と笑ったのだ。その友達はちょっと笑ってごまかしていたけど、私はその場の空気が急に冷たくなったように感じた。

「男だから」「女だから」という理由だけで、夢を笑われるのはおかしいと思った。保育士は誰かを助け、子どもたちの成長を支える立派な仕事。なのに、それを「男なのに」と笑ってしまうのは、その人が悪いというよりも、社会にある「男はこう、女はこう。」という固定概念のせ

いかもしれない。

社会には、男女の役割に関して決めつけや偏見が溢れている。例えば、テレビや映画では、男の主人公が困難な状況でも冷静に解決策を見つけるシーンがよく描かれる。その一方で、女性は感情的だったり、誰かに助けられたりすることが多い。こうした描写が無意識のうちに「男はこう、女はこう。」という固定概念を強化してしまうのだと思う。

私たちが当たり前だと思っていることの中には、誰かを知らないうちに傷つけてしまっている「偏見」や「決めつけ」があると思う。ある日、テレビで「車いすの女性が、就職面接で『会社に迷惑をかけそう』という理由で断られた。」という話を見た。その人は実際にはとても優秀で、前の職場でもリーダーとして働いていたという。でも「障害がある＝助けが必要＝負担になる」という偏見がその人の可能性を閉ざしてしまった。この話を聞いたとき、自分にもそういう思い込みがなかったかを考えた。「外国人の人は日本語が苦手かもしれない。」「お年寄りにはスマホが使えないかも。」など、自分の中にあった小さな決めつけに気づいた。誰かに言ったことはなくても、心の中で勝手に判断していたことが恥ずかしくなった。でも、私はそこで気づいた。偏見や固定概念は、意識す

ることで変えられるということに。もし「男なのに泣いてる。」と思ったとき、「泣くことは感情を表す大切なことだ。」と考え直す。もし「女の子なんだから」と誰かが言ったとき、「性別で人の性格や能力は決まらない。」と言えるようになる。そうやって一人一人が意識して、自分の中の「当たり前」を見直していけば、少しずつ社会の雰囲気も変わっていくと思う。

私の家族の例を挙げてみよう。父はいつも家事を手伝ってくれる。掃除や洗濯、料理もしてくれるのだが、幼い頃の私は、「男の人は家事をしない」という偏見があった。それに反して、父は「家事はみんなでやるものだよ」と、家族の中で平等に分担していた。そのおかげで、私は自分が大人になっても、家事を苦手だと思わず、むしろ楽しんでやることができるだろう。

社会や家庭での「役割分担」についても、偏見がある。例えば、「女の子は料理が得意で、男の子は料理をしない、」といった考え方は、普段の生活やメディアで無意識に植えつけられていることが多い。しかし、実際には料理が得意な男性もいるし、逆に料理が苦手な女性もいる。大切なのは、性別で役割を決めつけるのではなく、個々の人の得意分野を尊重することだ。

私は、このように小さなところから変えていくことで、

偏見や固定概念を少しずつなくしていけると信じている。社会を変えることは簡単ではないかもしれないが、私たち一人一人の意識が変われば、確実に周りも変わるだろう。そして、何よりも「違っていることが悪いことではない。」という意識を持つことが大切だと思う。偏見や固定概念は、何か特別な力で一気になくせるものではない。けれど、私たち一人一人の意識や行動で、確実に減らしていくことはできる。まずは、自分の中の「当たり前」を疑うことから始めたい。そして、誰もが自分らしく生きられる社会を目指して、私はこれからも考え、声を上げていきたい。

例えば、友達が何かを言ったとき、「それはどうしてそう思うの？」と問いかけることから始めるだけでも、その人の考え方を少しずつ変えるきっかけになるかもしれない。自分一人の力では限界があるかもしれないけれど、みんなが少しずつ意識を変えていけば、社会全体も変わっていくのだろう。偏見をなくすためには、まず自分から始めよう。そして、周りの人たちにもその大切さを伝えていきたい。そうすることで、もっと素直に自分らしく生きることができる社会をつくっていきけるのではないかと思う。